

《翻訳》

P. C. マルティン
「工業化初期における通貨制度の
形成と貨幣経済」—— その (2)

久 保 清 治 訳

(前号のつづき)

2. ドイツ銀平価の不充分性

金の突発的な流入に対処するため金貨の鑄造を自主的に停止したプロイセン貨幣政策の基本的な考え方は、19世紀前半ドイツ貨幣経済の基軸となった銀本位制についても妥当する。フリードリヒ・フォン・シュレッターは、ドイツ諸国のすべてが多かれ少なかれ抱えていた問題を、プロイセンについては次のような簡単な叙述で捉えている。「国王は、単に一種類の鑄貨のみを鑄造すること、つまり銀塊の買付けを法的に義務付けられている訳けではなかった」⁹¹⁾。この点は事実であり、要するにドイツにおいて貨幣が鑄造され、それが流通するということは、国庫の充実化と密接に関連していたと思われる。素材価値の低い貴金属を精錬して鑄造利益を得ようとした18世紀においては、貨幣の鑄造はなんら重大な問題を引き起こしは

しなかった。当時は、貴金属は低廉な価格で購入され利鞘をつけて鑄造された後、合法的に支払手段として流通した。

ところで、貨幣鑄造においては、鑄貨の額面価格と金属の素材価値に差額が発生し、その差額は鑄造独占権を有する君主の利益となった。ホフマンは、彼の『貨幣論』において、この点を以下のように明確に把握している。すなわち、鑄造利益が発生するのは、その貨幣に信頼しうる一定の価値表示が賦与され、利鞘をつけて流通する場合であり、通常、鑄造権を有する国家が独占価格を設定して差益を獲得する（歴史的には多くの場合、「君主」が鑄造利益を享受した）。しかしながら、鑄貨独占利潤の時代は、貨幣製造の技術的な発展（紙幣の登場）あるいは貨幣流通の技術的な発展（銀行、振替および通信システムの改善）によって、もはや貴金属に依存する必要性がなくなるや否や、つまり貨幣がそれ自体——既存の貨幣量に基づいて——自力で貨幣の流通速度を高める状態になるや否や、終焉してしまった、と⁹²⁾。

しかしながら、民間の商取引量は、国家による貨幣供給独占の政策と明らかに対応しなかった。第六表で示したとおり、プロイセン内外における

第六表 1828～1836年 プロイセンの貨幣流通速度

年	銀貨の総使用量	銀貨の純増加	「限界貨幣流通速度」
	(1) 百万ターラー	(2)	(1) : (2)
1828	67.809	1.619	41.8
1829	73.392	4.275	12.5
1830	77.102	6.504	6.2
1831	53.020	4.410	3.2
1832	73.472	0.240	4.3
1833	73.011	0.300	4.2
1834	91.717	1.141	5.0
1835	77.173	0.411	4.1
1836	68.516	0.502	3.5

出所：第(1)欄は DZA, Rep, 103, 292, 7v-8; 141v-142. 第(2)欄は Schrötter, II, S. 549ff.

銀貨の総使用量は、統計がとれるようになった1828年から1836年まで、実際ほとんど増加しなかった⁹³⁾。他方、その期間の銀貨の純増加分は計1,940万ターラーであったので、したがって貨幣の流通速度は全く上昇しなかったといえる。また、同表(1)欄の合計額1億2,000万ターラーにのぼる銀貨の鑄造量の年額の推移は、それを純増分で割算して得られる「限界貨幣流通速度」の低下傾向を意味する。

工業化初期における通貨制度の形成に対し、ドイツの銀平価が不十分であったことは、主に、次の二つの異なった制度的特徴に起因しよう。第一は、ドイツの貨幣鑄造の増加は外国からの貴金属の購入によって可能であったことであり、第二は、鑄貨の品位がより永く効力を持てばもつほど、その流通量の増加が期待できなかったことである。

a) 外国生産への依存

第七表に掲げたように、1820年頃の全ドイツの銀生産高は150万ターラー余りであった。いまプロイセン一国だけをみても、戦争賠償金の支払いと

第七表 1820年頃のドイツ銀生産

生産国	生産量 (kg)	ターラー
ザクセン	11,892	711,886
ハノーファー	8,361	500,556
プロイセン	4,677	280,000
ナッサウ	819	49,000
ブラウンシュヴァイク	358	21,420
バーデン	138	8,246
クアヘッセン	10	616
計	26,255	1,571,724

出所：Art. Silbererze in: Joh. Gg. Krunitz's ökonomisch-technol. Enzyklopädie oder allg. System der Staats-, Stadt-, Haus- und Landwirtschaft, Bd. 154, Berlin 1831, S. 249 f.

いう異常な量の銀貨が流出した後の1820年から1835年まで年平均190万ターラーの銀貨が鑄造されていたことを考えると、まさしく銀の生産量は全般的に不足していたと思われる。主要な産出国であるザクセンとハノーファーは、銀鉱脈を開発して銀生産を増大させたが——1832～38年ザクセンは年平均15,203kg、ハノーファーはブラウンシュヴァイクを含めて1831～38年のあいだ平均12,259kg、プロイセンは1832～37年のあいだ平均5,322kgの生産量に増加——、しかし、そのような生産国でさえ海外から銀塊を輸入せざるを得なかった。この輸入実績は、第八表の1820年代前半フランス向けへの多額の銀輸出が行われていた時でさえ継続されていた点からも知りうる。ただし当輸出は、賠償金支払いという一方的な無報酬の移転支出に依るものである⁹⁴⁾。

さらに、ドイツの通貨状況を著しく混乱させたものとして、次の要因が加わる。すなわち、ドイツで採掘された銀塊の大部分は、自国内で贋造鑄貨を鑄造したため、外国の鑄造所で溶解されてしまったことである。1753年の旧帝国品位（「協定鑄貨率」）は、ザクセンでは1763年まで、ハノーファーでは1817年までしか維持されなかった。前者は1841年に、後者は1834年にプロイセンの14ターラー鑄貨率に移行したので、その間の工業化初期に

第八表 ドイツとフランス間の銀取引（銀塊と銀貨）

年	千フラン		収支尻
	フランス向け輸出	フランスからの輸入	
1825	7,264.7	330.5	6,934.2
1826	22,661.8	416.1	22,245.7
1827	2,573.3	1,597.1	940.2
1828	6,822.8	702.5	6,120.3
1829	6,561.8	973.6	5,588.2
1830	15,496.0	3,012.0	12,484.0
計	61,344.4	7,031.8	54,312.6

出所：Statistique Générale de la France, Commerce Extérieur, 1838, Nr. 8, S. 34/35, Nr. 9, S. 36/37, Nr. 10, S. 38/39.

おける鑄貨品位の技術的な問題は、ひとつの好個の研究対象となるように思われる。

b) 素材価値を低減させた諸要因

ザクセンもハノーファーも基本的には共通しており、ここでは、資料の多いザクセンに限定して説明することにしよう⁹⁵⁾。ナポレオン戦争が終束してドイツの貨幣経済は落ち着きを取り戻したと思われたが、しかし、協定品位の20フローリン鑄貨率はもはや維持しえないことが明白となってきた。1821年7月に、ザクセンの騎士領・都市の代表者は、1冊のパンフレット『プロイセン貨幣を流通させるための方策』を提出したが⁹⁶⁾、その中で、「品位の劣るプロイセン鑄貨が国内に累増しており、やがて全ての取引がプロイセン鑄貨で決済されるようになるであろう」という推測がなされた。1823年5月には、ライプツィヒの官僚や商人代表者も、ザクセンの正貨であるクーラント貨の不足を訴え、これらの主張は、ヨーロッパで百年来もっとも鑄貨の豊かな国として見なされていたザクセン民衆に、大きな衝撃をひき起こしたのであった⁹⁷⁾。当訴状には、「ライプツィヒ市において、あらゆる団体から寄せられた様々な取引支払手段の不足や流通貨幣状態の悪化にかんする苦情」についても検討がなされている。1824年8月、国王は、「鑄貨の品位は金属価値に相応すべきであるという理論的根拠を示すように」という所見をつけて、市当局に対し早急に等族会議に救済案を示すよう指示した⁹⁸⁾。

鑄貨の豊富なザクセンで、どうしてその国の正貨が流通しなくなったのであろうか、という問題を解くことは簡単ではない。かかる難問を解明することは、工業化初期の通貨制度の形成にかんし、非常に貴重な理論的成果を残すことになるだろう。ところで、上記ライプツィヒの苦情について、まず貨幣担当の官僚は、次のように、他の地域にもあてはまるその場しのぎ

の弁解を行なった。「南アメリカにおける出来事（独立）は、当国からの銀流出を停止させ、ヨーロッパならびに我国の貿易取引を縮減させた⁹⁹⁾。」デュセルドルフの貨幣担当官僚も、この解釈を利用している。根本的には、新世界における伝統的な銀産出国からの銀輸出の激減は、ヨーロッパ大陸における初期の工業化に対し、そしてまた、それと密接に関連する貨幣需要の増大に対し、大きな障害となったのは事実であろう¹⁰⁰⁾。さらに、ザクセンの場合、多くの有力な貿易商の報告からも分かるとおり、貿易収支の逆調が悪化要因として付け加わったと考えられる。ザクセンの人々は、銀貨溶解のため、ベルリン、ハノーファーとくにハノーファー銀行およびオランダに、あるいはアウグスブルクを経由してイタリアや中近東に送金した。ハノーファー銀行の報告書からも明らかなように、1813～1822年のあいだに鑄造されたザクセン銀貨の五分の三の約510万ターラーが、当行に預けられたという¹⁰¹⁾。また、他の報告書によれば、1816～1833年に950万ターラーのザクセン貨が、イタリアや大取引がなされていた中近東に流れていったという¹⁰²⁾。そこで結局、ザクセンの^{ミューンツ・コミッション}通貨委員会は、国内協定貨の費用のかかる品位維持を断念し、銀含有量を少なくした銀貨鑄造を決定した。ザクセン鑄貨が消滅したもっとも大きな要因は、つぎのように捉えることもできる。

「純銀1マルクから13⅓ライヒス・ターラーの品位を有する鑄貨を、投機の対象もしくは貴金属という商品に変えることは魅力的な商売となろうが、それら貴金属を回収して再び貨幣として鑄造することは採算が合わない。なぜなら、それでは鑄造費用が二重となり、他国から貴金属を輸入して精製したほうが安上がりになるからである。」

国王ヨハンは、後年の1829年の所見の中で、鑄貨品位悪貨の問題を単的に次のように述べている。

「品位の劣る悪貨および、それに類した貨幣が、全般的に物の値段を決定している。なぜなら、価格決定を支配する商人や大工場主は、賃金や原材料の支払いを、儲けんがために、常に悪貨で取り行おうとしているからである。」¹⁰³⁾

ザクセンの貨幣がすでに額面価額の2～3%を割って流通していても、人々はより品位の劣る鋳貨で取引しようとするので、もはや政治的な対処を施しても、国内鋳貨の流出を食い止めることはできなかった¹⁰⁴⁾。1824年の法令集をみると、ついにプロイセン・ターラー貨が、ザクセン貨とほんの僅かの差額で交換されるようになった¹⁰⁵⁾。ザクセン通貨消滅のプロセスは拍車かけられた。1827年7月ライプツィヒ為替・銀行業者たちは、「法定の交換比率は全く保持できず」、「くずもの鋳貨のみが私どもに償還されてくる」と嘆き、「わが国貨幣制度の憂慮すべき事態の発生」をくりかえし指摘している¹⁰⁶⁾。当時、闇市場では、法定品位を有したことの無い小銭クーラント貨が流通した。ザクセン政府は通貨混乱に対する打開策を見出せず、ついに、ドイツで最初で唯一保持していた貨幣の鋳造高権を断念した。1833年7月27日、大蔵大臣ツェシャウは、プロイセンに毎年ザクセンの採掘銀を購入してくれるよう申し出た。そのとき、銀価格の騰貴のため銀取引から手を引いていた海外王立貿易会社の総裁ローターは、すぐに書面による交渉を開始したけれども、しかし、1833年10月、当交渉はザクセン側によって打ち切られてしまったのである¹⁰⁷⁾。

b) の1 鋳貨率…ザクセンの貨幣問題は、工業化の指導国としてのプロイセンの鋳貨率を導入することによって解決に向かったが、この点を明確に究明したのは、秀れた貨幣理論家J.G.ホフマンである。彼の分析は、工業化初期の通貨制度の形成過程における鋳貨率の金属価値に関する問題を取りあげ、鋳貨それ自体は流通中に摩滅するので、貨幣価値は一定期間後に額面価額よりも低くなる、という現象に注目した（そこでは、鋳貨の品位

は、たとえば「純銀1マルクから14ターラー」というような铸貨率で捉えられた)。铸貨価値の目減りについて、シュトゥットガルトの宮廷銀行は次のように述べている。

「前世紀の後半頃まで、各国の協定貨は打歩を全く付けないか、あっても少し付けて铸造することができた。たとえば1760年代、純銀1マルクは23フローリン、45クロイツァーで仕入れ、铸造業者に15クロイツァー支払ったので、24フローリンとなった。しかし、現在はそうはいかない。協定貨を溶かして、それよりも品位の劣るクロネン・ターラー貨を铸造したとしても、依然として大損をこうむることになる」。¹⁰⁸⁾

このことは、铸造時の誤差が法定許容範囲の0.1%~0.2%であったので、铸造技術上の問題とは関連しない。

ちなみに、カールスルーエ造幣局の調査によると、プロイセンのターラー貨は10年間で0.434%、20年間で0.562%、40年間で1.245%摩滅したとのことである¹⁰⁹⁾。ということは、ある铸貨が永く使用されると目減りしてゆくので、同じ額面の新貨が铸造され流通させようとしても、新貨は保蔵されて市場に出廻らなくなる、ということの意味する。1815年に至るまで、プロイセンの貨幣品位は65年間、ザクセンのそれは52年間なんとか存続したが、ザクセンの場合は不利な状況のもとで、新貨も摩滅した旧貨と同様に消滅したのである。この点について、ホフマンは次のように要約している。

「流通貨幣の摩滅が進行すると、つまり支払手段の金属価値が使用にともなって低下すると、旧貨幣の金属価値は新しく铸造された新貨のそれよりも低い。旧貨は価値下落に応じて相場がたてられるので、外国為替を自己宛てに振出させるよりも、新貨を送金したほうが有利となる。このことは、新貨は国外に流出して国内では流通せず、やがて消失することを意味する」。¹¹⁰⁾

b) の2 鑄造技術…とくにフランスから伝播されたドイツの鑄造技術は、19世紀初頭に出現した単一鑄型の輪型機¹¹¹⁾とドイツ人機械工ディートリヒ・ウールホルン発明の新機種によって¹¹²⁾、著しく発展した。貨幣鑄造の技術面での改良は、商品製造のそれよりも優るとも劣らないくらい重要であったと思われる。なぜなら、開始したばかりの工業化の過程は大量の貨幣を必要とするので、深刻な「貨幣不足の事態」を発生させる危険性があったからである。

ドイツのどの諸国においても、鑄貨の量目公差に関する規定がなかったということ、したがって、鑄貨が一定重量を満たしていないとき、造幣局長はその鑄貨を回収しなければならない、という規定がなかったということは非常に重要である。このような規定を最初に発布したのはイギリスで1816年と1842年に、ドイツの場合は、1838年鑄貨統一協定の第5条但し書で、協定ターラーに対し1.5%の公差を定めたにすぎなかった。

プロイセンは、通貨改革が効力を発して、1821年から貨幣不足の事態を回避することができたが、その結果、鑄造利益は著しく低下した。なぜなら、国民は貴金属の含有量に鋭い関心をもちはじめ、したがって表示どおりの鑄貨率で鑄造せざるをえず、また同時に、銀価格も高騰していたからである。かつてプロイセン国家の重要な資金源であった鑄造利益は1815～1835年間に僅か19,639ターラー、逆に1838年においては33,025ターラーの損失であった¹¹³⁾。

ホフマン氏が指摘しているように、貴金属価格は支払手段の金属含有量に大きな影響をうけ、また金貨や銀貨は鑄造費の分だけ金属価値に上乗せされるので、「銀を基軸とする鑄貨品位や計算制度は、やがて存続しえなくなる」¹¹⁴⁾。また、鑄造技術の改良によって鑄貨の摩滅は少なくなったけれども、固定鑄貨率の形態をとった通貨制度は、工業化の開始とともに崩壊するのではないか、という危惧は依然として払拭できなかった。商取引に不可欠な貨幣に含まれる金属価値は必ず減少してゆくし、新たに鑄造さ

れた貨幣は全く市場に出廻らなかったからである。このような事情のもとに、こんどは、素材価値のもたない紙幣への移行が重要な問題となってきたのである。

したがって、プロイセンの貨幣制度は全般的にみて、工業化初期におけるドイツ諸国の中で最も発展していたと言ってよいであろう。その場合、支払手段の平均価値は大量鑄造によって表示品位の近いところに維持されたので、新規の鑄貨は、進行中の工業化を貨幣サイドから支え、かつ市場に出廻って流通することができた¹¹⁵⁾。このような機能のゆえに、プロイセンの貨幣は全ドイツのみならず、他の諸国にも普及することができた。他方、ザクセンの場合は、貨幣制度の歴史的な流れに逆らった政策が実施され、その結果、高度の経済発展の可能性を逸するという大きな損失を被ってしまったのである。

b) の3 補助貨幣の問題…旧来の伝統的な貨幣制度が工業化に対し阻止的に働いたのは、ザクセン国だけではなかった。たとえば、ヴュルテンベルクは18世紀以来ずっと改鑄政策を実施し、法定鑄貨率——1753年に1ターラー当り20フローリン、後に24フローリン——は保たれることはなかった。19世紀初頭には、自由市場で非常に摩滅した鑄貨しか流通しなかったことがある¹¹⁶⁾。そして、その後ブラバンター国のクローネン・ターラーがとくにオーストリア軍の通過後に出廻った。1817年から1837年の間には、次のものが鑄造された。協定特別ターラー貨8,258フローリン、2グルデン貨と12クロイツァー貨203,382フローリン、クローネン・ターラー貨1,900,343フローリンの以上合計2,111,983フローリン、加えて3,161,992フローリンの補助貨幣が鑄造された。このようにしてヴュルテンベルクの貨幣制度はより一層混乱し、相場の付けようもない流通貨幣によって引き起こされた経済的困窮——国庫も同様——は、止むことがなかった¹¹⁷⁾。

また、すでに1807年『補助鑄貨に対し断固たる手段をとる必要性』とい

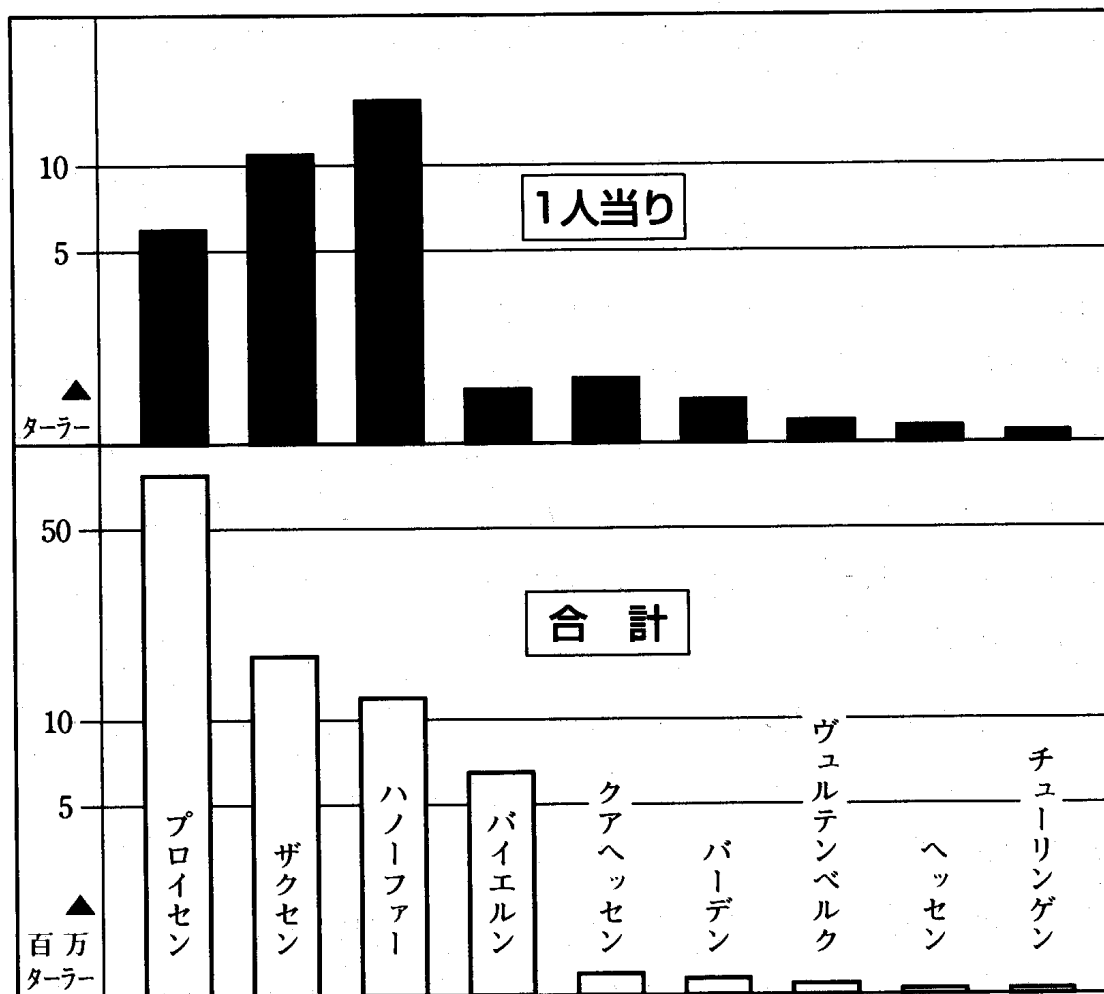
う申し立てが専門家のあいだから提案されたことがあったが、効果はなかった¹¹⁸⁾。1817年には、再び鑄貨委員会が設置されたが、そこには、ハムブルクの通貨論者ビュシュのような身分・見識の高い専門家は入っていなかった¹¹⁹⁾。ヴュルテンベルクでは、鑄貨悲劇の本当の原因を知らなかったか、あるいは知りたくなかったので、政府は貨幣制度の安定化を見せかけるため、常にトリックを施した。1823年、鑄貨問題にたずさわっていたある鉱山官が、大蔵省に次のようなことを提案した。つまり、価値が下がって、現在24½フローリン率で交換されている鑄貨を、「政権七年目」に「純銀1マルクから24½」フローリンの鑄貨を鑄造して流通させる、というものであった¹²⁰⁾。このことを鑄貨委員会が1822年にくりかえし表明したけれども、「真正の通貨」再来の期待は、実際には、机上の空論にすぎなかった¹²¹⁾。

1823年11月14日、24フローリン率の鑄貨鑄造を再開する製造許可状が発令された。しかし、市場では24½フローリン率の1ないし2グルデン貨が流通し、クローネン・ターラー貨が鑄造の主流となった¹²²⁾。また、外国製の補助貨流入に対する不満も多かった¹²³⁾。たとえば、非常に品位の劣るフランスのラウブ・ターラー貨が国庫に回流してきた時には、当貨の流通を禁止する命令が出されたほどであった¹²⁴⁾。1819年、ある国庫担当官は、外国製の補助貨幣——そのほとんどはヴュルツブルク、レイニングおよびコブルグ製造のもの——のあまりに多額の流通量に関し、「現存の補助貨のうち、ほとんどいつも半分は国外のものである」、といて苦情を訴えた¹²⁵⁾。1827年スイスの補助貨が流入してきた時には、その引受けを国庫は拒絶すべきである、と談判する者もいたという¹²⁶⁾。

すこし良い状態を保持できたのは、バーデンであった。バーデンでは、1820年代初め四種以上の補助貨幣があった¹²⁷⁾。1827年11月に銅貨、1829年4月に銀貨の鑄造を法定品位どおりに開始できたので、ヴュルテンベルクのような工業化に障壁となった貨幣経済の弊害は、徐々に排除されていっ

た¹²⁸⁾。しかし、1827年に最新鋭の鑄造機ウールホルンシェンを導入したとき、貨幣品位にかんし不透明な問題が発生した。すなわち、公式には従来どおり24フローリンの鑄貨率であったが、1831年6月20日の鉱山局長の秘密文書によると、暫く24½フローリン率でクローネン・ターラー貨を鑄造せよ、という大蔵大臣の口頭による命令に言及している¹²⁹⁾。とはいっても、当貨の鑄造は補助貨幣の乱用をともなわないで定期的に継続され、それが国内に流通しているプロイセン・ターラー貨を排除するのに、どの程度役立ったかは定かでない。

第四図 ドイツ諸国におけるクーラント銀貨の鑄造量 (1816～1833年)



出所：Promemoria über die Annahme eines gleichen Münzsystems im Zollverein, in: Protokoll der Dresdner Münzkonferenz von 1838, HStA Stuttgart, E 36-39 aus Büschel 86.

ところで、バイエルンの場合は、早くも1809年2月に24½フローリン率にあっさりと移行し、クローネン・ターラー貨48,081フローリンを鑄造、貨幣問題を伝統にとらわれることなく解決することができた¹³⁰⁾。そして、24½フローリン率のバイエルン鑄貨は、まもなく南ドイツのすべての地方に普及していった。また、バイエルンのクローネン・ターラー貨は南ドイツの通貨安定に貢献し、大量鑄造されたプロイセン・ターラー貨と競合することはなかった。

第四図に掲げた正貨の鑄造総額および一人当りの鑄造額をみるならば、プロイセンの貨幣が、ドイツ諸国の中で圧倒的な優位を保っていたことが分かる。一人当り鑄造額の高いザクセンとハノーファーの場合は、既述のとおり、旧貨の品位悪化によって新貨が国外に流出したので、その結果、貨幣鑄造量はそのまま流通量を示すものではないことに注意されたい。

このようにして、工業化初期における実物経済の発展過程——たとえば、ドイツ連邦諸国における種々さまざまな経済発展の離陸機会および離陸速度——は、貨幣経済の発展過程と密接に関連していた、と結論づけることができよう。しかも、その場合、貨幣経済の発展とくに貨幣単位と支払手段の制度形成は、第一に、すでに18世紀に形成された通貨統一化の度合い、第二に、貨幣理論と法制・行政の整備、第三に、経済史の各画期に大きな影響を及ぼす歴史的な偶然性、に依存したとすることができるのである。

注

※ 本稿は、「通貨制度の形成と計算単位」および「通貨制度の形成と支払手段」の問題に限定する。「通貨制度の形成と貨幣代替物」、「通貨制度の形成と貨幣市場」あるいは「通貨制度の形成と支払行動」の問題は、1815年から1870年までを視野に入れたドイツ貨幣制度史という、もう少し時期を拡大した時代

範囲のなかで取り扱われるべきであろう。

- 1) *Gesetz-Sammlung (GS) für die königlichen preußischen staaten 1836*, S.318.
- 2) J.G.Hoffmann, *Die Lehre vom Gelde als Anleitung zu gründlichen Urteilen über das Geldwesen mit bes. Beziehung auf den preuß. Staat*, Berlin 1838, S.187-189.
- 3) 最近の理論的研究については, H. G. Johnson, A Note on Seigniorage and the Social Savings from Substituting Credit for Commodity, Money, in R.A. Mundell, A.K.Swoboda (Hg.), *Monetary Problems of the International Economy*, Chicago und London 1969, S.323-329, Ders., Inside Money, Outside Money, Income, Wealth, and Welfare in Monetary Theory, *Journal of Money, Credit and Banking* I (1969), S.30-45 を参照.
- 4) P.C.Martin, Die Entstehung des preußischen Aktiengesetzes von 1843, *VSWG* 56 (1969), S.499-542.
- 5) J. Kahn, *Geschichte des Zinsfußes in Deutschland seit 1815 und die Ursachen seiner Veränderung*, Stuttgart 1884, S.70-97.
- 6) *Deutsches Zentralarchiv*, Historische Abteilung II, Mersburg (DZA), Rep. 80 V,II, S.4.
- 7) 1825年恐慌にかんし, イギリスにおける発生原因については, Th. Tooke und W. Newmarch, *Die Geschichte und Bestimmung der Preise während der 1793-1857*, I, Dresden 1858, S.719-727 を参照. 1830年恐慌にかんし, フランスにおける政治的發展に状況については, 海外王立貿易会社の1830年の年報を参照のこと.
- 8) E. Dürr, *Geld-und Bankpolitik (Hg.)*, Köln-Berlin 1969, S.13.
- 9) Hoffmann, *Lehre vom Gelde*, S.32.
- 10) A.a.O., S.103-105; J.G. Hoffmann, *Lehre vom Gelde* の付録 Berlin 1841, S.126-128 は, ドイツ鑄貨制度の時代を, とくにプロイセン国と関連させて述べている.; A. Schmidt, *Geschichte des englischen Geldwesens im 17. und 18. Jahrhundert*, Straßburg 1914. とくに行政権にもとづいて実施された同様の事態は, 1907年, ドイツ帝国においてみられる.
- 11) M. Chevalier, *La monnaie*, I. Aufl, Paris 1850, S. 139-148, 2, Aufl, Paris 1866, S.324-334.
- 12) M. Vrolik, *Le système monétaire du royaume des Pays-Bas*, Utrecht 1853, S. 146, 747.

- 13) Fr v. Schrötter, *Das preußische Münzwesen 1806-1873*, Münzgeschichtlicher Teil, Bd. I, Berlin 1926, S.22.
- 14) 1690年のライプツィヒ铸貨率は純銀1マルクから12ターラーを铸造したのに対し、エフレイム・イツィヒ会社は33.8ターラーを铸造した。E. Engel, Die Geldprägungen nach dem Leipziger Münzfuße, dem Konventionsmünzfuße und dem 14-Talerfuße in dem Kurfürstentume und Königreiche Sachsen. *Wissenschaftl. Beilage der Leipziger Zeitung*, No.35 zu No.103 v. 3.5. 1855, S.175 を参照.
- 15) Bergrate v. 12. 2. 1819, HStA Stuttgart, E 221/2155 の編集による。別の統計によると、計606万7,887フローリンの铸貨が製造されたともいわれている。宫廷銀行は、この铸造によって27万5,021フローリンの利益を得た（前掲 Bergrate v. 22. 5. 1821, E221/2152 の報告）。シュトットガルト貨は、1768～1818年のあいだ国家管理のもとに铸造されたものではなかった、F.G. Jäger, *Beiträge zur Geschichte des Münzwesens in Württemberg*, Tübingen 1840 参照。ヴュルテンベルクの铸貨は、またたくまに全南および西南ドイツに氾濫した。1819年7月6日にグルデン制を導入したナァソーは、カウラ社がヴュルテンベルク貨をフランクフルトで「6%の打歩」をつけて売却している、と苦情を訴えた（前掲 StA Stuttgart）。
- 16) Hoffmann, *Lehre vom Gelde*, S.152.
- 17) 1834年8月11日の命令, HStA München, AStA, MH 15345. 1827年, ニュールンベルクの商人組合長は、ヴュルテンベルク貨の流入を認めている（22. u. 25. 5. 1827, HStA München, AStA, MH 15346）。
- 18) Schrötter, I. S.5.
- 19) P. C. Martin, Die Einbeziehung der Rheinlande in den preußischen Währungsraum, *Rhein. Vierteljahrsbll.* 32 (1968), S. 493 (Fußnote).
- 20) Schrötter, I, S.76, 19, 91.
- 21) O. Veit, *Grundriß der Währungspolitik*, 2. Aufl., Frankfurt 1961, S. 434 f., P.C.Martin, Monetäre Probleme der Frühindustrialisierung am Beispiel der Rheinprovinz (1816-1848), *Jber. f. Nat.ök. u. Statistik* 181 (1967), S. 123 f.
- 22) Schrötter, I, S. 85, II, S.842.
- 23) Martin, Monetäre Probleme, S. 131 f.
- 24) Schrötter, I, S.350 f.
- 25) Tooke-Newmarch, I, S. 425 f.
- 26) Votum ans Innenministerium v. 12. 3. 1845, DZA, Rep. 120, A. X, Nr. 5, Bd. 2.

- 27) アメリカ合衆国にかんしては, M. Friedman und A. J. Schwartz, *A Monetary History of the United States, 1867-1960*, Princeton 1963, 1876年以降の大英帝国に関しては A. J. Schwartz, *The Money Matters, Lloyd's Bank Review*, September 1969, S. 1-16, ヨーロッパ諸国およびドイツ連邦にかんしては, M.W. Keran, *Monetary and Fiscal Influences on Economic Activity; The Foreign Experience, Fed. Res. Bank of St. Louis, Review* 52 (1970), 2, S. 16-28.
- 28) J. A. C. Michelsen, *Der vollkommene Haushalter und Kaufmann oder Sammlung von Haushaltungs-, Holz-, Interess-, Rabatt-, Münz-, Maab- und Gewichtstabellen*, Neue Ausgabe, Berlin 1820, S. 290.
- 29) 最も一般的に利用されているのは, J. C. Nelkenbrecher, *Allgemeines Taschenbuch der Münz- Maab- und Gewichtskunde*, 11. Aufl. Berlin 1815, 12. Aufl. 1820, 13. Aufl. 1821, 14. Aufl. 1828, 15. Aufl. 1832, 16. Aufl. 1842, 17. Aufl. 1848.
- 30) 「通貨領域 Währungsraum」という用語は, しばしば通貨価値の意味で使われる場合があるが, ここではそうではなくて, 同じ計算単位を用いた地域的な範囲を示す.
- 31) Michelsen, S. 290-344 に依る.
- 32) StA Dresden, *Finanzarchiv*, Rep. XXVI, Nr. 564 n, in Loc. 41 829 を参照. そのほか, L. A. Brüel, *Materialien für die zu erwartende Reform des deutschen Münzwesens*, Hannover 1831 (プリュールはハノーファーの貨幣製造人であった). 北ドイツ信用銀行の概略については, 同著者 *Aus der Geschichte unseres Geldes*, 1966, S. 15 f.
- 33) GS 1834, S. 25.
- 34) Finanzministerium v. 11. 2. 1834, StA Hannover 33c./700.
- 35) Umfrage an Obrigkeiten und Polizeibehörden v. 24. 3. 1834, a.a.O., 33c/741.
- 36) 金庫貨幣 Kassengeld というのは, 租税金庫への納付のために1817年まで特別に鑄造されたものであり, 14ターラー金庫貨は15ターラー金貨(5ターラーに相当するピストール金貨)に等しかった.
- 37) HStA Stuttgart, Akte E. 221/2152. プロイセンの鑄造諸機関のなかで, ただデュセルドルフのみが一定の自由裁量権をもっていた, Martin, *Monetäre Probleme*, S. 128 ff.
- 38) A. Munkert, *Zur hundertjährigen Feier der Verlegung der Moneta Regia in das frühere Hofmarstallgebäude*, Mitt. d. bayr. numism. Ges. 28 (1910), S. 1-48.
- 39) この前貸金は, いわゆる「イギリス基金」から引き出された. 1818年に,

イギリス占領時代に質借りしていた貴金属の延べ棒は返還された (StA Hannover, 33c/667) . ハノーファーの貨幣鑄造にかんする叙述は HStA München, AStA, MH 15352 に依る. ハノーファーの鑄貨にかんする公文書は大部分, 焼失している.

- 40) Abgedr. in Schrötter, II, A. 337 ff.
- 41) Gutachten, a.a.O., S. 353 f.
- 42) Martin, Monetäre Probleme, S. 123 f.
- 43) J. G. Büsch, *Sämtliche Schriften über Banken und Münzwesen*, Hamburg 1801, S. 589 ff.
- 44) Gutachten, a.a.O., S. 342. 変動相場をもった外国通貨は, Kronentaler, Laubtaler, Fünffrankenstücke および Konventionsgeld であった.
- 45) GS 1821, S. 159.
- 46) Schrötter, II, S. 379-383. 1821年にかんしては, Beilage I in der Schrift des preußischen Münzwardeins Loos, *Über die neuen Scheidemünzen*, Berlin und Posen 1823.
- 47) DZA, Rep. 120, A X, Nr. 1, vgl. a. Schreiben der Berliner Kaufmannschaft an Handelsministerium v. 29. 7. 1824, ebd.
- 48) Schrötter, II, S. 391, gibt den Tarif zum Teil wieder, ganz StA Koblenz, 403/3257.
- 49) Martin, Einbeziehung, S. 496 f., Schrötter, I, S. 169-221.
- 50) Schrötter, I, S. 125.
- 51) Hoffmann, *Lehre vom Gelde*, S.159 ff. ベルリンでは現在まで, 1マルクの $\frac{1}{10}$ を「グロッシェン」と呼んでいるが, これは1871年にマルクにおけるターラーの $\frac{1}{3}$ から派生したものである. 今日でも, 5プフェニヒ貨は「ゼクゼール」と呼ばれているが, この場合, 6プフェニゲは $\frac{1}{2}$ グロッシェンであった.
- 52) GS 1830, S. 3.
- 53) Schrötter, I, S. 166.
- 54) 日常の取引で新制度を利用しなかった例は, 希れである. 1831年ベルリン行政庁は, 1831年7月6日のシュレーゲン新聞155号の付録で, ワイン商が依然として1ターラー=24グロッシェンで取引していることに忠告を与えている (DZA, Rep. 120, AX, Nr.1) .
- 55) K. W. F. Grattenauer, *Über die preußische Realmünze und ihren Zahlwert im inneren Verkehr*, Breslau 1810. 参照
- 56) Schrötter, I, S. 53.
- 57) Schrötter, II, S. 351.
- 58) Brief Vellnagel v. 13. 2. 1822, StA Stuttgart, E 221/2153.

- 59) Martin, Monetäre Probleme, S. 125.
- 60) このことは、1822年4月1日付オッペンハイムの同僚達への回状のなかに見られる、「あなたがたは、これまでどおり、13ライヒス・ターラーのプロイセン正貨ならびにベルギー正貨を10プロイセン・ターラーで、またブラバンター・ターラーをフランに24グルデン鑄貨率で交換することができます……」(DZA, Rep. 120, AX, Bd. 1)。さらに、1848年のNelkenbrecher 年鑑は、「銀行家は1ターラーを100サンチームに換算して記帳している」と報告した(17. Aufl., 1848, S. 124)。
- 61) 彼らの貨幣業務については、HStA München, AStA, MH 5411 を参照せよ。
- 62) 1807年9月9日付アウグスブルク商人団体代表者の請願書は HStA München, a.a.O., MH 15344.
- 63) Gutachten v.1.5.1811, ebd.
- 64) Kopie eines Schr. v. 26. 11. 1841, ebd.
- 65) 純銀1ポンドから52½グルデン鑄造
- 66) IMF編集の“International Financial Statistic”は、たとえばフランスやイタリアや西ドイツに関して、それぞれ別々の「貨幣」で表示している (XXIII 2, Februar 1970, S.133,137,180)。
- 67) たとえば, M. Friedman und A. J. Schwartz, The Definition of Money: Net Wealth and Neutrality as Criteria, *Journ. Of Money, Credit and Banking* I (1969), S. 1-14 参照。
- 68) B. P. Pesek und Th. R. Saving, *Money, Wealth, and Economic Theory*, New York 1967, S. 39 ff.
- 69) Lehre vom Gelde, S. 12. 貨幣生産費論の発生と批判については, G. Cassel, *Theoretische Sozialökonomie*, 5. Aufl., Leipzig 1932, S. 426.
- 70) A.a.O., S. 11.
- 71) W. G. Hoffmann, F. Grumbach, H. Hesse, *Das Wachstum der deutschen Wirtschaft seit der Mitte des 19. Jahrhunderts*, Berlin-Heidelberg-New York 1965, S. 814.
- 72) さしあたり P. C. Martin, *Deutsche Geldgeschichte 1815-1870* 参照。
- 73) GS 1827, S.33, 1836, S. 318.
- 74) Schrötter, II, S. 549 ff.から付加。
- 75) GS 1818, S. 95.
- 76) ドレスデンにあったザクセン王立貨幣鑄造所において、1797年から1836年末までの各年の金および銀の使用量については, StA Dresden, Finanzarchiv Rep. IX b, Abt. A, Sect. II, Lit. E, no4, S 204 v-205 v in Loc. 41 896; 1763年以降に鑄造された金貨・銀貨・銅貨については ebd.,

- Rep. IX b, Abt. A in Loc. 41 828(bis 1831); ebd. Rep. IX b, Abt. A in Loc. 41 828 (bis 1835).
- 77) 1826年2月25日フランクフルト市官報 S. 315f.に依る。当市の紙幣には、次のような権能が与えられた。「この紙幣によって、流通性のない金貨・銀貨ないし未鑄造の金塊・銀塊と24フローリンの鑄貨率で150万グルデンの金額まで、あるいは官庁が認めた関税額と同額まで購入することができる」。「紙幣は、当市の貨幣鑄造所が貴金属を鑄造できない事情にある場合にかぎり発行しうる」(a.a.O., S.316)。1830年の紙幣発行額については、1830年10月19日の市参事会決定に基づき同年同月22日に発表され、1831年5月5日に実施された。
- 78) Schriftwechsel in DZA, Rep. 120, A X, 2.
- 79) 18. 7. 1820, ebd.
- 80) 16. 7. 1827, StA Dresden, *Finanzarchiv*, Rep. IX b, Abt. A, Sect. II, Lit. D, no 5 in Loc. 41 827. すでに1815年に、「主として民間の個人金庫で取り扱われている不十分な貨幣の小袋包みに関するドレスデン鑄造所の報告書」が作成された。A.a.O., Lit. E, Nr.4, Bll. 100-109.
- 81) GS 1824, S. 225.
- 82) DZA, Rep. 120, A XIV, Nr. 3, Bd.2.
- 83) 銀貨の平均的な鑄造費用は2%であったので、金貨の僅か0.25%の鑄造費は、それゆえ言うまでもなく、施行しやすくしていた。Schrötter, I, 364 参照。
- 84) A.a.O., S. 373.
- 85) A.a.O., S. 372 ff.
- 86) A.a.O., S. 384, 380.
- 87) ライン金貨の鑄造については, GLA Karlsruhe 237/855. 鑄造量は年1万フローリンの変動があった。GLA 237/33 952.
- 88) Hinweis auch auf die "Leichtigkeit des Transports" v. 24. 9. 1830, StA Dresden, *Finanzarchiv*, Rep. IX b, Abt. A, Sect. II, Lit. D, no 1, Vol. VII in Loc. 41 895.
- 89) 前掲 Handelsdeputierte und Kammermeister Leipzig.
- 90) Schrötter, I, S. 380.
- 91) A.a.O., II, S. 209.
- 92) Vgl. Hoffmann, *Lehre vom Gelde*, S. 189 ff. 当書の45ページで、ホフマンは次のように定義している、「貨幣は流通すると、素材価値すなわち使用された金属の価値よりも、はるかに大きな価値を有するようになる」。
- 93) 銀貨の輸送は、1824年まで専らプロイセンの郵便局が取り扱ったので、第六表の数字は、ほぼ完全に、内外全域における銀貨使用量の推移と看なし

てよいであろう。

- 94) 1871年以降の推移にかんしては, E. Samhaber, Die Kriegschädigung, in: Entscheidung 1870, *Der deutsch-französische Krieg*, Stuttgart 1870, S. 256-289.
- 95) 工業化初期のハノーファーの貨幣制度については, Akten in StA Hannover 33 c/697 f., 700, 741, 745 f.
- 96) StA Dresden, *Finanzarchiv*, D, I. 14, Rep. XI., Nr. 392 in Loc. 41 215.
- 97) Schreiben v. 24. 5. 1823, a.a.O., Rep. IX b, Abt. A, Sect II, Lit. D, no 5, VolIII, in Loc. 41 827
- 98) 21. 8. 1824, a.a.O., Nr. 392, 脚注 96.
- 99) A.a.O., Vol. II in Loc. 41 827, 脚注 97.
- 100) Vgl. Martin, Monetäre Probleme, S. 128 ff. 同様に, ミュンヘン貨幣担当官僚の苦情については, HStA München, AStA, Münzamt 277, 278.
- 101) フランス人の撤退後, 当行の収支は銀の貯蔵が1823年の740万から1827年の1,170万 MK. Bco. に増加したことを示している. Vgl. StA Hamburg, Hamburger Bank 33, Bilanzen 1823 ff.
- 102) Hoffmann, *Zeichen der Zeit*, S. 153.
- 103) StA Dresden, *Finanzarchiv*, Rep. IX b, Abt. A, Sect. II, Lit. D, no 5, Vol. III, in Loc. 41 827
- 104) Hoffmann, *Lehre vom Gelde*, S.97.
- 105) GS 1824, S. 39-42 und 179-182.
- 106) 13. 7. 1827, a.a.O., 脚注 103, Vol. II.
- 107) A.a.O., Rep. IX b, Abt. A. Sect. II, Lit E, no 6, Vol in Loc, 41 834.
- 108) Hofbank v. 4. 1. 1822, HStA Stuttgart, E. 221/2153.
- 109) Schrötter, II, S.10.
- 110) Hoffmann, *Lehre vom Gelde*, S. 48 f.
- 111) Schrötter,I, S. 259.
- 112) ディートリヒ・ウールホルンによる新しい鑄造機械の利点については, Grevenbroich, 15. 2. 1818, Schrötter, II, S. 336 f.
- 113) Schrötter, II, S. 436.
- 114) Hoffmann, *Lehre vom Gelde*, S. 99 f.
- 115) ホフマンは, 法定品位との平均的な格差を1¼%としている (*Zeichen der Zeit*, S.16).
- 116) A.a.O., 28 ff.

- 117) Wangenheim an Finanzministerium v. 13. 11. 1897, HStA Stuttgart, E 221/2150.
- 118) Gutachten Wangenheim v. 7. 11. 1807, ebd.
- 119) Finanzministerium v. 16. 6. 1817, a.a.O., E 221/2151.
- 120) Bergrat v. 4. 7. 1823, ebd.
- 121) Gutachten v. 18. 2. 1822, a.a.O., E 221/2153.
- 122) Pfaff, Geschichte des Münzwesens in Württemberg in seiner Verbindung mit dem schwäbischen und Reichsmünzwesen, *Württ. Jahrbuch* 1858, II, S. 188-216.
- 123) HStA Stuttgart, E 221/2155.
- 124) 前掲 Finanzministerium v. 23. 12. 1810.
- 125) 26. 2. 1819, ebd.
- 126) Innenministerium an Finanzministerium v. 8. 3. 1827.
- 127) ヴュルテンベルク通貨委員会報告書の脚注121.
- 128) GLA Karlsruhe, 237/33 952.
- 129) Ebd.
- 130) HStA München, AStA, Hauptmünzamt, 595.

(出所) Paul C. Martin, Rahmenordnung und Geldwirtschaft der Frühindustrialisierung, in; H. Kellenbenz, *Öffentliche Finanzen und Privates Kapital im späten Mittelalter und in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart, 1971, S. 87-117.